

SCHEDULE

19日(土)	10:30~ 泥の河 (105min) 上映後トーク 小栗原平監督	13:00~ 戦場ぬ止み (129min) 上映後トーク予定	15:45~ コタンの口笛 (126min)	18:30~ ピュ〜びる (93min) 上映後トーク 松永大司監督&ピュ〜びるさん
20日(日)	10:30~ 二十才の微熱 (114min) 上映後トーク 橋口亮輔監督	13:15~ 苦海浄土 (49min) あいラブ優ちゃん (48min)	15:30~ リュミエール映画 日本篇 (29min) チセ・ア・カラ われらいえをつくる (57min) 上映前解説 古賀太(日本大学芸術学部映画学科教授)	17:45~ 神々の深き欲望 (175min)
21日(月)	10:30~ 砂の器 (143min)	13:30~ 蜂の巣の子供たち (86min)	15:15~ 地の群れ (127min)	18:15~ 橋のない川 第一部 (127min)
22日(火)	10:30~ 二十才の微熱 (114min)	13:15~ 戦場ぬ止み (129min)	16:15~ ピュ〜びる (93min)	18:30~ コタンの口笛 (126min)
23日(水・祝)	10:30~ リュミエール映画 日本篇 (29min) チセ・ア・カラ われらいえをつくる (57min) 上映前解説 古賀太(日本大学芸術学部映画学科教授)	12:30~ 異邦人の河 (115min) 上映後トーク 大塚汎さん(総映社代表、本作助監督)	15:00~ 砂の器 (143min) 上映後トーク 田島良一(日本大学芸術学部映画学科教授)	18:00~ A (135min) 上映後トーク 森達也監督
24日(木)	10:30~ 神々の深き欲望 (175min)	13:45~ 蜂の巣の子供たち (86min)	16:00~ 橋のない川 第一部 (127min)	18:45~ 苦海浄土 (49min) あいラブ優ちゃん (48min)
25日(金)	10:30~ A (135min)	13:15~ 泥の河 (105min)	15:45~ 異邦人の河 (115min)	18:15~ 地の群れ (127min)

差別と偏見。これはいつの時代にも、どこの国でも存在するものです。例えばアメリカ、差別はそこら中に転がっています。偏見も大あります。でも、だからこそアメリカでは差別と偏見と真正面から向き合い、戦う姿勢がちゃんとあります。日本ではどうでしょうか？ 単一民族を装い、差別と偏見は見えませんが、でもあるのです！そこを考える映画祭にしてほしい！

鳥越俊太郎 (ジャーナリスト)

声の大きな人をわざわざ映画で描く必要はない。そんなのはほっておいても十分に届く。それよりも耳を傾けなければ聞こえないような声、または声さえも出せない人を描くのが映画だと思う。マイノリティを直視しなければこの国は映せない。

松江哲明 (映画監督)

学生がすべてやる映画祭も今年で5年目。4月からテーマを探し、7月に出てきたのが「差別映画祭」。そりゃまずいと思ったが、「マイノリティ」という言葉が出てきてこれはイケると思った。今風の作品が揃うかと思ったら、意外に古風な映画が多くてまたびっくり。さてどんなお客さんが来るのだろう。

古賀太 (日本大学芸術学部映画学科教授)

12.19(土)→12.25(金)

ユーロスペース
EUROSPACE

東京都渋谷区円山町1-5
KINOHAUS 3F
TEL:03-3461-0211
HP: <http://www.eurospace.co.jp>

前売券: 1回券=(一般・学生ともに) ¥800 / 3回券=¥2,100
当日券: 1回券=一般¥1,200・学生¥1,000 / 3回券=¥2,700
各回入替制・整理番号順入場・自由席

*前売券はご鑑賞当日、劇場窓口にて入場整理番号とお引換ください
*連日10:00よりその日ごとに整理番号の引換 / 当日券の販売を開始します
*やむを得ない事情により作品、上映素材、及び上映時間が変更になる場合がございます
*製作から長い年月が経っているため、お見苦しい箇所やお聞き苦しい箇所がございます



ニッポン・マイノリティ映画祭 NIPPON MINORITY FILM FESTIVAL

主催: 日本大学芸術学部映画学科映像表現・理論コース3年映画ビジネスゼミ、ユーロスペース
上映協力: RKB毎日放送 / 神戸映画資料館 / 松竹 / 新日本映画社 / 総映社 / 天通 / デイメーション / 東京国立近代美術館フィルムセンター / 東風 / 東宝 / 日活 / PFF事務局 / マジックアワー / 民族文化映像研究所 / 安岡フィルム
HP: <http://nippon-minority.com> Twitter: @nichige_eigasai Facebook: <https://www.facebook.com/nippon.minority>

2015.12.19(土)→12.25(金)

映画は彼らを見逃さない。

ユーロスペース
EUROSPACE





『リュミエール映画 日本篇』(1898-99頃)

1895年12月28日。映画の歴史はリュミエール兄弟から始まる。彼らが世界中に派遣した若いカメラマンたちのうち2人は、日本にもやってきていた。日本で初めて撮られた32本の動く映像の中には、アイヌ民族の踊りが2本あった。19世紀末、世界の中心だったフランスが極東の日本に向けた視線から、日本におけるマイノリティの歴史が浮かび上がる。映画の生みの親リュミエール兄弟が残した貴重な作品を、1995年の映画生誕百年版で上映。

撮影:コンスタン・ジレル、ガブリエル・ヴェールほか
フランス/モノクロ/35mm(BDにて上映)/29分



『コタンの口笛』(1959)

アイヌ民族の姉弟の苦悩を描いた石森延男の同名児童文学が原作。マサとユタカの中学生姉弟は北海道・千歳の街外れにあるコタンに父と三人で暮らしている。偏見の目で見られ、様々な逆境に立たされながらも、めげることなく健気に生きる力強い眼差しに心を打たれる。成瀬組の玉井正夫が撮影を務め、脚本は前作『霧雲』に続き橋本忍だが、アイヌと成瀬の異色の組み合わせのせいかソフト化されていない隠れた秀作。

監督:成瀬巳喜男
日本/カラー/35mm/126分



『地の群れ』(1970)

社会派の巨匠熊井啓が、同名原作小説の作者井上光晴との共同脚本により、日本社会の原罪ともいふべき差別問題を鋭く描いた傑作。舞台は米軍基地のある軍港、佐世保。ある少女の訴えをきっかけに、被差別部落と被爆者たちの間でくすぶっていた憎悪が燃え上がる。差別が差別を生み出す「地の群れ」の中で、もかくように生きる人々の叫びが耳にこびりつく。日本の差別の根源がここにある。1970年度キネマ旬報ベストテン第5位。

監督:熊井啓
日本/モノクロ/35mm/127分



『異邦人の河』(1975)

喧嘩に巻き込まれ深傷を負った山本(ジョニー大倉)は、瀕死状態でありながら身投げした少女を助ける。彼女との出逢いが、自国への高い民族意識と誇りを目覚めさせ、当時の日本の世情、韓国政府の問題を力強く訴えた。ミュージシャンとして活動していたジョニー大倉は、本名・朴雲煥での出演を自ら希望し、熱演を繰り広げた。三国志劇画の大作『蒼天航路』の原作者として名を馳せた、李學仁が在日韓国人に対する差別問題を描く。

監督:李學仁
日本/モノクロ/35mm/115分(東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品)



『A』(1998)

1995年、日本を震撼させたオウム真理教による地下鉄サリン事件。それ以降のオウム真理教に対する日本社会の態度を教団内部から描き出したドキュメンタリー。一連の事件後教団の広報副部長として活動していた荒木浩を、中立の立場を維持しつつ映し出す。信者の生活、信者に対しての疑惑は偏見、差別へと変わっていく。事件から20年が経つ今、日本社会はどのように彼らと向き合おうべきなのか。1998年ベルリン国際映画祭招待作品。

監督:斎藤也
日本/カラー/BD/135分

今年で5回目を迎える日藝生企画・運営の映画祭。今回のテーマは“日本のマイノリティ”。映画が次第に娯楽の中心になった20世紀は、世界的に人種や人権に対する意識改革の時代でもあった。しかし日本人の多くは、いまだに「単一民族」であるという認識のもとに生きている。しかしそれは幻想に過ぎない。被差別部落、在日韓国人、アイヌ民族、沖縄の基地問題や広島・長崎の被爆者、LGBTなど、この小さな島国にも各々に異なった事情を抱えた人々が今日も抑圧されたまま生きている。民主主義の名の下に声なき者の存在が黙殺されるこの国は、本当の意味で先進国と言えるのだろうか。「目に見えないものを見せる」、それが映画の原初的な役割である。映画の生みの親リュミエール兄弟が世界中に派遣したカメラマンは、約120年前のアイヌ民族の姿を捉えていた。それから激動の時代のうねりの中で、映画作家たちはさまざまなマイノリティを映し出してきた。本映画祭では日本におけるマイノリティと日本映画の歴史を照らし合わせながら、今日の、そして明日の日本を考えたい。目をつむり口をつくむのではなく、まず現実を知ることから始めよう。

【同時上映】



『チセ・ア・カラ われらいえをつくる』(1974)

日本初のアイヌ語映画で、1972年に行われたアイヌの伝統的な家づくりの記録である。はじめに敷地にボン(小さな)・ケトウニを立て、火をたき、イナウ(木を削って作る祭具)を立て、祈る。屋根の構造の基本となる三脚状のケトウニは、折りにも用いられる。家が完成するとチセ・ノミ(家への祈り)。材料となった木や草の悪霊を鎮める儀式をする。民族文化映像研究所を主宰し、日本各地の風俗を映像に収めた姫田忠義の代表作。

監督:姫田忠義
日本/カラー/DVD/57分



『蜂の巣の子供たち』(1948)

松竹を退社した清水宏が独立プロで製作した戦後第1作。終戦直後の日本の戦争孤児と復員兵の交流をロードムービー形式で描いた本作は、ほとんどの登場人物に素人を起用している。登場するのは実際の戦争孤児たち、復員兵を演じるのは元熱海駅の職員であり、オールロケーションにより撮影されている。戦前に確立した「実写的精神」で戦争孤児という存在を即興的に描いた本作は、日本の「戦後」を鮮烈に映し出す。

監督:清水宏
日本/モノクロ/35mm/86分



『神々の深き欲望』(1968)

三國連太郎、北村和夫、嵐寛寿郎らの実力派キャストを迎え、2年に渡る沖縄ロケを敢行した、今村昌平前期の集大成となる175分の超大作。急成長する日本社会から取り残された南方の孤島を舞台に、因習に縛られた人々と何も知らない都会の男が邂逅し、抑圧されていた人間の「性」が氾濫する。シネマ・スコープサイズのカラーフィルムが鮮やかに映し出すのは、荘厳な大自然とそこに生きる動物たち、そして原色の「日本人」の姿だ。

監督:今村昌平
日本/カラー/35mm/175分



『橋のない川 第一部』(1969)

住井すゑのベストセラー同名小説が原作。明治末期、被差別部落である奈良県小森に暮らす人々は、周囲の偏見に苦しみながら生きていた。二人の兄弟を通し、学校や村での差別の実態、そして人々が全国水平社を結成するまでの長く苦しい道のりを描く。身分とは何か、人間が人間らしく生きるとは何かを問いかける。兄弟の祖母役の北林谷栄の渾身の演技が忘れがたい。第6回モスクワ国際映画祭ソ連映画人同盟賞を受賞。

監督:今井正
日本/モノクロ/35mm/127分



『苦海浄土』(1970)

『あいラブ優ちゃん』(1976)

『苦海浄土』は、女優・北林谷栄演じる琵琶警女が水俣の町を彷徨い、病に苦しむ人々に寄り添い続ける。水俣病患者のドキュメンタリーでありながら、同時にフィクショナルな映像が混在する異色作。『あいラブ優ちゃん』は監督自ら、一部カメラとナレーションを担当し、生まれつき障がいを持つ自らの長女・優ちゃんを描ったセルフドキュメンタリー。RKB毎日放送の異色のTVドキュメンタリー作家・木村栄文の代表作2作。

監督:木村栄文
日本/カラー/BD/49分、48分



『砂の器』(1974)

松本清張の原作をもとに、ミステリーを超えた人間ドラマとして知られる邦画の代表作。ある殺人事件をきっかけに、ハンセン病が原因で差別を受けた親子の悲しい境遇が紐解かれてゆく。この病気が差別の理由となっていた時代を映し出している。逃れられない「宿命」と3シーンのカットバックによって観客をカタルシスへと誘う音楽と構成は圧巻。第29回毎日映画コンクール大賞他3賞、1974年ゴールデンアロー賞大賞受賞。

監督:野村芳太郎
日本/カラー/35mm/143分



『泥の河』(1981)

また戦争の跡が消えない昭和31年、大阪。河岸にとまっている宿舟は、街の人々から「郭船」と呼ばれ、そこに住む子供たちは母親が売春婦のために差別を受けている。寄り添ってくれるのは食堂を営む一家のみ。やがて、大人の世界を覗いてしまった少年は、生きていくことの哀しみを知る。モノクロの鮮烈な映像が心に突き刺さる、小栗康平監督衝撃のデビュー作。第55回キネマ旬報日本映画ベスト・テン第1位。

監督:小栗康平
日本/モノクロ/35mm/105分



『二十才の微熱』(1993)

第6回PFFスカラシップで製作され、国内外の数多くの映画祭で高い評価を受けた橋口亮輔の出世作。主人公は男性に体を売って稼ぐ20才の大学生であり、ゲイの世界をリアルに描いた作品でありながら、繊細で静かな熱を帯びた素晴らしい青春映画でもある。彼らの胸中が少し切なく追ってくるのはきっと、誰もが一度あの青い季節を通りすぎたからであろう。セクシャル・マイノリティの視点から描かれた青春映画の傑作だ。

監督:橋口亮輔
日本/カラー/16mm/114分



『ピュ〜ぴる』(2011)

「自分の生き様を描って欲しい」。性同一性障害を抱える現代アーティスト、ピュ〜ぴるの8年間を、親友であり、本年「トイレのピエタ」で長編劇映画デビューを果たした松永大司が撮ったドキュメンタリー。性への違和感を、自ら手がけたコスチュームを身に纏うことで表現していたピュ〜ぴるは、やがて彼自身がアートとして注目を浴びるようになる。“自分らしく生きていく”ピュ〜ぴるの素直で真っ直ぐな生き方が、心に強く響く。

監督:松永大司
日本/カラー/BD/93分



『戦場ぬ止み』(2015)

あなたは沖縄を知っていますか。連日流れるニュース映像の断片だけではわからない沖縄の現実を、「標的の村」(第87回キネマ旬報ベスト・テン 文化映画第1位)の三上智恵監督が米軍基地建設抗議運動の最前線の熱気そのままに映し出す。戦後70年が経過した今日でも、政府の国策に翻弄され、「いくさ」がつづく沖縄に生きる人々のたゆまぬ平和への願いが綴られる。題名(いくさばぬどうども)は、沖縄の歌の一節。

監督:三上智恵
日本/カラー/DCP/129分

